

リバーフロント研究所座談会

「やっぱり水辺が好き～これまでと、これからの30年～」

ゲスト

木村 直樹氏 (東京ウォータータクシー株式会社)

佐藤 裕久氏 (株式会社バルニバービ)

杉本 容子氏 (一般社団法人水辺ラボ)

林家あんこ氏 (落語家)

座長

山口 敬太氏 (京都大学)

(本稿は、令和7年12月18日に座談会を行い、紙上スペースの関係で、編集部の責任により編集したものです。)

— 平成23(2011)年に河川空間の利活用に関する規制が緩和され、営業活動を行う民間事業者等による河川敷地の占用が可能となったことで、水辺のオープンカフェや川床、イベント広場などの多様な利活用が進められ、魅力的な水辺空間が誕生しています。

ただ、その担い手たちが、何を大切にしながらそれぞれの事業に取り組んでいるのか、その中で水辺はどんな意味をもっているのかについて、じっくり話を伺う機会はあまり無かったのではないのでしょうか。

今回の座談会は、それを叶えるために、事業を通じて川や海、運河など広く「水辺」と呼ばれる場所に日々関わっておられる方々にお集りいただきました。テーマは「やっぱり水辺が好き～これまでと、これからの30年～」。座長には、公共デザインや都市・地域再生が専門の京都大学・山口敬太先生をお迎えし、ゲストの皆さんの水辺とのかかわりの履歴を辿っていただくことから始まります。歩みを進める中で気づきや課題に感じていること、さらに今後の展望に至るまで、たっぷりとお話を伺いました。

▼目次

1. 「好き」のなかにあるもの
2. 水辺とのかかわりの履歴
3. これまでの気づき、そしてこれから

1. 「好き」のなかにあるもの

【山口】京都大学の山口です。木村さん、佐藤さん、

杉本さん、あんこさん、本日はお集りいただきありがとうございます。座談会のテーマは、「やっぱり水辺が好き」です。「好き」というテーマは、学術誌や業界誌ではあまり取り上げられないので、貴重な機会かと思います。主観的な話も含めて自由に話していいよという趣旨と理解しています。

私の自己紹介をさせていただきます。私は水辺を含む景観の計画・設計について、歴史的なアプローチも重視しながら研究・実務に取り組んでいます。「水辺が好き」ということ言えば、私の原点は、40年間通い続けている兵庫県姫路市の夢前川(ゆめさきがわ)です。この川には5歳から毎年通っていて、川でアユを掴んで、それを炭で焼いて家族で食べることが毎年の楽しみであり原風景になっています。親子三代にわたり長年通い続けている川です。

水辺はこのように人々の原風景になることが多いですし、歴史的にも大事な場所です。京都・鴨川の、1800年代半ば頃の絵図を見ると、河原がある種の広場のような、公園のような空間だったことが分かります。納涼床がつくられたりして遊び場であり、歌舞伎などの文化の発信拠点でもありました。遡れば、水辺での遊びは、古く平安時代の文学作品



山口 敬太 (やまぐち・けいた) 氏

京都大学大学院地球環境学堂 准教授。工学研究科 社会基盤工学専攻兼任。博士(工学)。兵庫県姫路市出身。専門は公共デザイン、都市・地域再生論。共編著に『まちを再生する公共デザイン—インフラ・景観・地域戦略をつなぐ思考と実践』(2019年、学芸出版社)、雑誌記事に「地域に多面的価値を創出する川の自然再生の可能性」『河川』No.948、2025年、日本河川協会、pp.29-34。ほか多数。

や絵画にもよく見られます。貴族が遊興し、詩歌管弦をする宴の様子からは、水辺が日本文化の一つのゆりかごであったことが分かります。そうした価値をどうやって現代に生かしたり、新たにつくり出していけるかを考えています。

デザインの問題にも関心があって、平安時代の貴族の邸宅を見ると、水のつきやすい下流の氾濫原でも自然地形を生かしてたくましく建築されています。現代の感覚では、危険だから人が住んではいけないと言われてしまう場所です。水の恩恵をうまく使いこなす術は、現代においても参考になります。

実務では、例えば大阪の水辺、河川の歩道橋の上をテラスにしていこうという取組みに3年ほど関わっています。高層ビルや高速道路と一体の水辺の景観が素晴らしい場所ですが、気付かれていません。歩道橋で車は通らないといっても自由には使えない。そこでお酒を販売・提供したり、マルシェを開催したりする社会実験を重ね、地域の企業と連携し、運営組織をつくりながら新たな水辺のあり方を見出しつつあります。収益を地域のまちづくりに還元する仕組みづくりと並行して進めています。

私の自己紹介はこのくらいにし、ここからは東京ウォータータクシーの木村さん、パルニバービの佐藤さん、水辺ラボの杉本さん、落語家のあんこさんの順に水辺とのかかわりの歩みや個人的な思い、ご興味やご関心をお話しただけたらと思います。

2. 水辺とのかかわりの履歴

■「東京の水域を Street ストリートに」

【木村】改めまして、東京ウォータータクシーの木村でございます。社名から、何をしている会社か想像がつくかもしれませんが、事業の概要や成り立ちについて、水とのかかわりの個人史も交えてご説明させていただきます。

東京ウォータータクシーは、2015年の創業から早いもので11年目を迎えました。合い言葉は「東京の水域を Street ストリートに」です。皆さん、東京の水域ってどのくらいあると思いますか。港湾に限定しても約50平方キロメートル、都内の区で3番目に大きな足立区の面積に匹敵するんです。でも、この広い水域へのアクセス方法はかなり限られていますよね。ストリートアートやストリートミュージシャンという言葉に見るように、ストリートって、道であると同時に、広い意味で「あそびや文化のゆりかご」だと思うんです。水域もそうした自由な空間であってほしいという願いを込めました。



木村 直樹（きむら・なおき）氏

東京ウォータータクシー株式会社 最高執行責任者 COO 兼、東海海運株式会社経営戦略室室長。北海道函館市出身。日本初の水上タクシー専門会社を率いて、京浜港内の30カ所以上の乗降場を利用し、観光だけではなく、日常、災害インフラの足としての水上交通を担う。自治体や公官庁はもちろん、ディベロッパーやアート分野、先端技術領域など幅広いネットワークのもとビジネスを展開。

私どものバックグラウンドは港湾運送事業者です。聞き慣れない言葉だと思いますが、国内外から来た貨物船の貨物の積卸し、上屋や野積場への搬出入、港内でのはしけ運送などを担う業界です。実は私、東海海運という物流会社の職員でもあるんです。今でこそ港が整備されて大半の大型貨物船は岸壁に横づけ出来ますが、かつては沖までしか入れませんでした。そこまでは小型の船で行って作業員が大型船から荷物を積み下ろす必要がありました。つまり私たちにとって、船は元々大事な「相棒」だったんです。

貨物船の位置って毎日変わりますから、毎日違う現場に船で行くというのが我々の会社のDNAに刻み込まれていて、これが重要なポイントです。決まった航路ではなく、日々変わるお客様のリクエストやニーズに合わせてコースやサービスを提供する発想が根本にあるからです。この点で従来の旅客船には無かったイノベーションを起こすことが出来ると思っています。

船そのものにも特徴があります。まず、その大きさです。全長約7メートル、定員は8人と旅客船としては小さく、屋根も非常に低いです。干満差があっても橋の下や狭い運河も通れるようにと小さな船になりました。



▲イエローが目を引く精悍なフォルムの船体

提供：東京ウォータータクシー株式会社

設備としてはトイレ、エアコン、コンセントを完備しています。私自身、音楽を聴くのが好きということもあり、Bluetoothスピーカーを設置し好きな音楽をかけていただいています。あとはアルコールも含めて持ち込みをオッケーにしています。ワンちゃんも乗船可能で、御家族と一緒にクルーズ体験を楽しんでいただけます。

船が小さいからこそ、たくさんの船着場にリーチ出来て、柔軟な運航形態をとることが出来ます。使用出来る船着場は全部で36か所ありますが、船着場そのものの仕様や利用条件には差があります。少し専門的な話になりますが、船着場って基本的にその都度都や区が指定する管理者に予約するんです。船着場によっては5日前に予約しなければいけないところがあって、それだとすぐに拾えるタクシーというサービスに馴染まないということで、36か所のうち立地や船着場のスペックがいい船着場、リードタイムが短い船着場など12か所に絞り込みベーシックコースを設定しました。お客様は乗降する船着場と時間を選択し、WEBで手軽にご予約いただけます。もっと自分たちで航路を考えたいというお客様のニーズもあるため、それに対しては電話・メールで受け付け、全36か所の船着場を対象にお客様と対話しながら、カスタムコースを設定しています。

ここ1、2年は商品ラインナップを増やしています。小さなクルーザーで東京ー横浜を往復するサービスや世界各国を飛び回っている和食人との出会いをきっかけに、船の中にL字カウンターを備え付けて、お任せの懷石料理と日本酒を提供するサービスも始めました。一方で、お客様によってはただひたすら運河を静かに走ってくださいとか、浜離宮の中でただ漂っててください、とリクエストされる方もいらっしゃるんです。創業当時は「船は走ってこそ意味がある」と私も思っていたのですが、ひと言

で水辺といっても、お好きなシーンや楽しみ方は人それぞれだなという思いを強くしましたね。

私どもは創業以来「船は防災インフラである」ということも強調しています。東京都内の船着場の多くは防災船着場に位置づけられていて、発災時に人や物資を運ぶ結節点となることを目的としてつくられています。ただ、防災訓練は年に1度あるかないかだけなんです。それだけでいざという時に安全に離岸出来て、乗下船の誘導や物資の受け渡しを安全かつスムーズに出来るのかに疑問を感じていました。ですので、「毎日が防災訓練」とのスタンスで、常態的に船着場を利用することで船長たちの操船スキルを上げ、船着場周辺の住民や来訪者の方々にも船が離発着する場所として日頃から認知いただけるようつとめています。こうした事業スタンスがある程度認めていただけて、自治体との防災協定の締結や最近ですと企業のBCP（事業継続計画）対応についてもお声がけをいただいているところです。



▲東京都や港区、警察署と防災協定を締結

提供：東京ウォータータクシー株式会社

■芝浦で働く者の眼からみたベイエリアの変遷

【木村】この先は個人的な話になりますが、私、北海道の函館の出身です。皆さんが思い浮かべる赤煉瓦倉庫が幼い頃の遊び場でした。そのふ頭近くに、1970年代後半に元郵便局を改装したカリフォルニア・ベビーっていう洋食店が出来て、バターライスの上に焼きソーセージをのせてミートソースをかけたシスコライスが看板メニューでした。帰省の度にこれを食べながら、変わりゆく函館港を眺めていました。東京の大学を卒業して今の芝浦の物流会社に就職するわけですが、決して物流に興味があったわけじゃないんです。この会社が自社の倉庫を改装して、当時としては有名なライブハウスを営んでいました。恐らく50代以上の方で知らない人は

いないんじゃないでしょうか。今日ご出席の佐藤さんもご存知かもしれません。私は、函館同様、古い港湾エリアで新しい文化を発信している点に惹かれ、この会社に入社したわけです。その直後、近くにジュリアナ東京やGOLD（ゴールド）という今のクラブのはしりも出来ました。芝浦って時代の先端を行くような華やかなまちだったんです。

【佐藤】インクスティック¹⁾なんかは、僕がちょうど23歳でファッションのビジネスを始めた頃に出会いましたね。東京って、何てかこいいいんだろうと思ったところなんです。とんでもないものを見せてもらったと思いました。逆に今40年ほど経って、静かじゃないですか。

【木村】そうですね。静かになりましたね。

【佐藤】何が起こって静かになっちゃったんですかね。

【木村】まず芝浦インクはもともと期間限定プロジェクトで当初から1989年末クローズすることが決まっていた。その後もディスコや飲食店を数年継続しましたが、このエリアはもともとが物流のまちで決して繁華街ではありません。インクはもちろんジュリアナもGOLDも倉庫を改装した施設でした。物流施設の大空間を利用できたことと場所の特異性、そして物流のまちから住宅地に移行するいわば端境期だったからこそ、成し得たことだったように思います。

【山口】ベイエリアが華やかだった時代の空気感が伝わってきました。ありがとうございます。続いて佐藤さん、お願いしてもよろしいでしょうか。

■隅田川エリアのトリガー、MIRROR（ミラー）ビル

【佐藤】ご紹介いただきました、バルニバービの佐藤です。京都の町なかに生まれたので、鴨川は身近な存在でした。20代で東京を訪れた時は、それこそ港区の海のエリアはかっこいいところだなと思いましたが、僕が東京に住まいを移した2005年の段階では、見る影もなくなっていました。東京って、橋だらけだということを聞いていたし、水の都のイメージを持っていたけれど、水辺に対する親和性はあまりないねんという印象を正直持ちました。それから5年後に、隅田川の物件に出会ったんですね。それをまずスライドでお見せします。

隅田川沿いの物件との出会いは偶然でした。僕、実は2005年に東京タワーの前でレストランをやっていたんです。すごい大ブレイクして。でも、ブレイクし過ぎて、家賃を4倍に上げると言われて結局ビ



佐藤 裕久（さとう・ひろひさ）氏

実業家。株式会社バルニバービ創業者、代表取締役会長CEO 兼 CCO。京都府京都市出身。1995年南船場の材木店跡地に「Hamac de Paradis」（アマーク・ド・パラディ）を開業し、以後、全国に104店舗（2026年4月末時点）のレストラン・カフェ・ホテルを展開。書籍に『日本一カフェで街を変える男一人、モノ、金が輝くスーパー経営術』（2007年、グラフ社）、『一杯のカフェの力を信じますか？』（2006年、河出書房新社）。2022年2月には、環境省エコファースト企業に認定され環境保全先進企業として飲食業界を牽引。2024年「外食アワード 外食事業者部門」を受賞。

ルを追い出されたわけです。まあ、東京タワーにそんなに嫌われたんなら、次は第2東京タワーかなと思って、2009年、10年頃にスカイツリーが出来る前の押上辺りで毎日歩き回って物件を探したんです。面白い倉庫があるなと思って見ていたんですけど、当時あの辺りはスカイツリーへの期待が高過ぎて、まだ貸したくないと断られることが多かった。飛び込みで話をしに行ったり、不動産仲介の人と行っても断られる。それで、とぼとぼと墨田区側から厩橋、吾妻橋辺りを渡ってこっち（台東区）側に帰ってくるわけです。その時に会ったのがこの物件なんですね。ぱっと見たところ何の変哲もない、山野楽器さんがCDの配送場所に使っていた物流倉庫でした。その前はセメント会社の倉庫兼事務所でした。



▲改装前の隅田川沿いの物件

提供：株式会社バルニバービ

特徴的なのは、ビルの上部の小さな窓です。これは何かというと、実は、1960年ぐらいにこのビルが建てられた時の隅田川は汚染、ヘドロで汚臭がひどかった。実際、当時は隅田川花火大会も水質汚濁などの環境悪化で中止されるほどでした。臭いを避けて光を採るために採光部分としてつくられたのが、写真にもあるこの窓なんです。

【山口】なるほど。

【佐藤】あまりに臭いので、窓はほとんど閉めていたらしいです。1960年以降に公害認識が出てくる中で環境も改善されて、徐々に魚がいる川となり、釣りを楽しむ人が出てきたり、初夏にはミズクラゲがたくさん上がってくるような川に変わってきました。そうした時に初めて僕は、自分の原点である京都のイメージの中で、川をもっとみんなで愛でようぜっていうことをちゃんとお伝え出来る物件だと思ったんです。これは、7階建てのビルで、全部を我々が使い、各フロアで別の店を出していました。そして、ミラー（MIRROR）ビルと名付けたこのビルだけで年間18万人が訪れるほど人気になったんです。一本のビルによって蔵前がかっこいいまちになりました。これがトリガーです。



▲改装後の MIRROR ビル

提供：株式会社バルニバービ

というのは、この店が出来る前は商店がなかったんですね。唯一あったのは郵便局ぐらい。私たちが出店してから、今、予約が取れないと言われているBackpackers' Japan（バックパッカーズジャパン）の本間君がドミトリーをつくったり、ミシュラン三ツ星・ジョエル・ロブション元総料理長の渡辺雄一郎君がレストランNabeno-Ism（ナベノイズム）をつくったり、蔵前が日本のブルックリンと言われるようになった。

ですが、残念ながらこのビルは2年前に閉めました。2011年の開業以来ずっと繁盛し続けたんですけどコロナに見舞われて。もう少しコロナが長引く

かなと思って、自社ビルで3倍ぐらいの価値になっていたんで売ってしまったんですね。僕の読みの甘さです。あれぐらいで終息するなら持てたのにな、とちょっと残念であります。

でも、このエリアには、厩橋を越えて、浅草寄りに「食堂&呑み ボン花火」という店も経営しています。これは、東京都建設局による「隅田川“かわてらす”（社会実験）」の出店事業者として2016年に認定をいただいたものです。隅田川に面して、都の管理道の上にテラス席を設けています。

■「川もいいけど、海もね」

【佐藤】川沿いの店は、これまで10軒ほどオープンしてきました。先ほどの蔵前のビルや、大阪の道頓堀川沿い、広島河川敷と大阪の中之島沿いのGARB weeks（ガープウィークス、通称ガープ）もそうです。中之島は公募で民間募集がかかっていて、うちが取らせていただいたんですね。川に馴染む店になっていると思います。

こうして振り返りながら、最近、「うん、川もいいけど、海もね」と思ってるんですね。今回の座談会の主催がリバーフロント研究所さんなので、海の話をしてよいのか迷いますが、座談会のテーマに「水辺」と入っていたので、水辺であればいいのかなと思って。

【事務局】もちろん、海の話も、ぜひ。

【佐藤】2011年の東北の震災の時に、自分の親分的存在だった人から呼び出されて副首都をつくる意義を聞かされたことがあったんです。副首都自体は実現出来ませんでしたけど、そのロジックが非常に明確で、ビジネスをしている僕たちにも通じるなと思ったんです。それは何かというと、東京に住んでみて思いますけど、こんなに機能的で、エンタメが豊富で、バリエーションがあり、エキサイティングで、カルチャーがある街はなかなかない。これはもう絶対的に認めます。けれども、東京一極集中でいいのかを考えた時に、僕は地政学上の問題が起こると思っています。必ず起こるかどうかは分かりませんが、分散投資をしてリスクを軽減するべきだと考えていて、北海道から種子島まで分散させて土地を持っています。基本的に海、もしくは川沿いなんです。水辺に誘われてるんです。これはなぜかっていうと、分かんないです。しゃあない、性分です。ただ、絶対的に海がいいと思っている理由は、目の前に物が建たないわけですね、一生。これは、我々のような飲食業、素敵な時間を過ごしてもらう事業に

にとってはものすごい大きいことです。いいなと思ってテラスがあっても空き地があっても、そこに建物が建った瞬間に、それがかえってマイナスになってしまう時もある。

一方で、こんな出来事もありました。今、「食から始まる地方創再生」に力を入れている中で1995年の阪神・淡路大震災以降、放っておかれた土地に2019年に1軒のカフェレストランをつくりました。4ヘクタール（借地を含む）のこのエリアに今では23施設が出来、年間で約40万人が来てくれます。その中で水辺ということに関連して象徴的だったのが、5階建てのリゾートマンションホテルを建てようとして準備していた時です。周辺住民に一応ご説明に伺うわけですね。海沿いに建物を建てて、海も見えない、夕日も見えなくなるんで、すいませんと言ったら、ありがとうございますんですよ。それはなぜか。僕らにとって素晴らしい夕日が、地元の方にとっては鬱陶しい西日なんですね。価値観というものは人それぞれで、これほどに違うんだということを感じました。



▲「今、食から始まる地方創再生の道」の舞台、淡路島の夕日

提供：株式会社バルニバービ

それこそ今、僕たちはいたずらに海がいいと言ってますけど、2011年の東日本大震災の時、沿岸部の方はとんでもない苦しい思いをされました。そのことを意識しないといけない。防波堤のようなレギュレーションをみて、当初は社員の中にも、お客さんにもっと海辺を楽しんでもらいたい、そのためには防波堤がないといいのに、という声もありました。でも、いざという時にどうなるかを社内で議論し、意識改革を行ってきました。レギュレーションがある中でどれだけ面白く、魅力的にしていけるか、それを考えるようにしています。防波堤のようなレギュレーションがないと駄目だということは、今や当然のこととして、彼らの中で腑に落ちていると思います。

■店がまちの風景になるまで

【山口】興味深いお話をありがとうございます。川沿いのお店の原点が、京都の鴨川にあったことを初めて知りました。海沿い、川沿いの違いについてもお話いただいたことに関連し、1つ質問をよろしいでしょうか。

【佐藤】はい、どうぞ。

【山口】場所を選ばれる時に、ここはいいなとか、自分のビビッとくる何か基準ですとかあるのでしょうか。非常に気になりました。

【佐藤】本当に多く尋ねていただきます。で、この答えを出しました。僕は、実はどうやったら流行るかとか、ここに店を出して流行るかということは分からないんですよ。でも、1個だけ分かるとすれば、先ほど紹介した淡路島の野っ原もそうですし、隅田川のビルもそうなんですけど、椅子を持って行ってそこに座るんです。ここにカフェがあって、ここにカフェラテがあると。ここに友達、仲間がいて、彼女がいて、ああ、最高やと。こんな感じです。

例えばマーケティングデータっていうのは、実は過去のことを言っているんですね。過去のことっていうのは、我々が未来に創っていきこうというものの、つまりクリエイションに対して一切データがないんです。さっきの淡路島でいえば、人っ子一人歩い



▲視察時の現場



▲店がオープンした後

提供（上・下）：株式会社バルニバービ

ていないような場所。車では通れますよ、でも、生活者がほぼいなかったんです。うちのスタッフからでさえ、公共交通が一切ないところで、カフェは分かりますけど、アルコールをどうやって売るつもりですか、って言われました。でも、僕にとっては答えが明確なんです。「知るか」って言うんです。その真意は、「そんなことを知る必要がないんだ」という意味です。

どういふことかという、運転手がアルコールを飲むことは100%駄目なんです。これは疑う余地はありません。でも仲間の中には1人ぐらい飲めない人がいるんですよ。その人が運転したらいいだけの話じゃないですか。飲まないで我慢してでも家族や友達や彼女を連れて来たいと思える魅力的なものをつくろうということです。その魅力は、過去のデータの中には無くて、新たにクリエーションしていくものだ、イノベーションしていくものだということはいつも意識しています。未来を創ろうということです。そうやって実際創って来ました。未来を見る、ばら色の未来と、先ほど申し上げた災害のような危機の未来、どちらも見ておかないと。それは僕ら大人としての責任ですよ。

【山口】なるほど。ありがとうございます。

【杉本】私からもよろしいですか。

【佐藤】はい。

【杉本】先ほど、隅田川沿いのビルの例で、コロナがあって店を手放したと仰っていました。他方で水辺にたくさんのお店を生み出して来られましたよね。中之島公園のガーブは開店から15年も経っておられて。佐藤さんは店に対してどのようなビジョンをお持ちなのかをお聴きしたかったんです。これから20年、30年と続いていく続き方を考えているのか、あるいは無くなり方なのか、何がいい状態なのか、と。

【佐藤】そこは明確なんです、僕は。絶対に続けたいんです。

【杉本】ずっとですか。

【佐藤】はい。僕が2015年に上場したのもそれが理由です。僕の代で会社を終わらせるなら、絶対上場なんかしたら駄目なんです。僕、今、めっちゃ不自由ですもん。僕のことは置いて、カフェがまちにとって必要とされるものであり続ける、それが大事なんです。そういうカフェはまちの風景だと思っています。

【山口】なるほど。

【佐藤】カフェをその場所の文化や歴史と呼ぶと、人は大層に思うかもしれない。けれど、文化や歴史は実は人々の生活の中にあるものなんです。店もそういう存在であり続けたい。だから、店を閉める度に僕は泣いてるんです、本当に。1人っきりで。決まって最後の日は必ず行ってますね。諸事情があるんですが、やっぱり悔しくて残念で。あり続けられる店の存在はふるさとの一つでもあると思っています。

実は、南船場の1号店は先週30周年を迎えました。もう愛おしくて。ここで結婚式を挙げた方がお店にいらして、自分の娘もこの店で結婚式を挙げたと語ってくれてね。そういうものじゃないかなと僕は思っています。だから、少し水辺のことから離れますけど、お店っていうのは長く愛され、人々の生活やまちにとって必要とされるものだ。大阪中之島のガーブはいまだにずっと繁盛して15年。本当に必要とされている場所だと思うんですね。だからこそ、河川のオープン化で20年間という占用期間が決められていますけど、他方で、長く愛される場所を残せるレギュレーションがあってもいいんじゃないかなとは思っています。



▲ 30周年を迎えた南船場の1号店

提供：株式会社バルニバービ

【山口】非常に心に響くお話をありがとうございました。次は杉本さん、よろしいでしょうか。

■民設民営のハイブリッド公民館

【杉本】それでは、自己紹介かたがた活動を紹介します。今回テーマが「やっぱり水辺が好き～これまでと、これからの30年～」ということで、いつも自己紹介欄に「杜の都仙台生まれ、白砂青松湘南育ち、水都大阪に生きるまちづくり好き」って紹介して、これで全部言い表してと思っています。大学から大阪に出て、働き出してからずっと水辺に張りついて暮らして生きています。



杉本 容子（すぎもと・ようこ）氏

一般社団法人水辺ラボ代表理事、株式会社ワイキューブ・ラボ代表取締役、東横堀川水辺再生協議会まちづくり担当幹事。博士（工学）。一般小型船舶操縦士。国内旅程管理主任者。宮城県仙台市生まれ、神奈川県藤沢市出身。水辺や公園などパブリック空間を活かした魅力づくりが得意。まちに関わる様々な立場を实践し、まちづくりの新しいアプローチにトライし続けている。

大阪は北と南の繁華街が有名で、そこを御堂筋がつなぐ中心部の都市構造がありますが、そのちょっと東側に東横堀川という東京で言う日本橋川みたいな、高速道路で覆われた、暗くて汚くて怖いと言われた3Kの川が流れています。そこにβ本町橋（ベータほんまちばし）という拠点施設があります。「民設民営のハイブリッド公民館」と言うと、皆さん、ふわっと分かってくださるんですけど、レンタルスペースを中心に、船や人力船が使えて、遊べて、いろんな使い方をオーダーメイドしていただけます。運営事務局は一般社団法人水辺ラボが担っています。



▲β本町橋のエリアとその様々な使い方

提供：一般社団法人水辺ラボ

β本町橋は2021年にオープンして、大阪市との事業協定で、先ほど佐藤さんも仰ったように20年間の使用が約束されており、2041年まで続ける予定です。民設民営の建物が建っている場所は河川区域で、周りの緑道公園や水面のイベント活用と日常管理を行いながら、にぎわいづくり、魅力づくりをしています。この建物は2層で、1層140平米ぐらいなので、2層280平米ほどになります。河川構造物の上に建っているため、プロポーザルが終わった後に基礎を打ってはいけないと言われ、べた基礎に木造でつくりました。この地域で50年ぶりに上棟式をやったと地元の神社さんに言われたくらい貴重な木造建築です。

私の本業はまちづくりのコンサルタントで、最初は2005年に、仕事で地域の人たちと水辺の活用を考える案件を担当することから入ったのですが、途中からは手弁当でずっと河川・水面の占用実験や、河川区域内の公園区域を占用して使い方を考える実験をしたり、清掃活動やイベントの開催まで、いろんなことを試しながら、15、16年目にβ本町橋がオープンすることになりました。

それまでは、東横堀川水辺再生協議会という任意組織の地元活動として実施してきたのですが、これを機に有志メンバーで一般社団法人水辺ラボという運営法人をつくりました。

湘南地域で育ったので、原風景としてあるのは白砂青松なんです。大阪に出た時に、ここには水辺がないって思ったんですね。私が社会人1年目だった2005年に、日中は水都大阪構想という行政の構想をつくるお堅いコンサルの仕事をしてるんですけど、関係者も多くてなかなか進まなかったんです。本当にこれ実現するのかという案件を抱えてストレスがありました。その中で「水辺のまち再生プロジェクト」のメンバーが面白いことやっていて、会いに行ってみたら、デザイナーもいればカフェのママもいれば、DJもいれば、不動産屋もいればというように、色々な人たちが水辺でゲリラ的な活動をしていて。整備前のまだ路上生活者が多くて薄暗いイメージがあった中之島公園に毎月第1水曜日にランチを持って集まって、手すりに梯子をかけて水際まで出て行ってお弁当を食べようとか、橋の欄干をジャックして橋の上でバーをやろうとか、当初は一切許可を取らずにやってるんです。数人から始まって、最後には100人規模になっていきました。こういう自分たちの手で水辺を面白くしようぜみたいな人たちの存在が、活動の原動力になってい

ます。

水都を推進する橋下徹さんが知事だった時に、大阪府都市魅力創造局という新しい部局がつくられ、そこで民間人に出向の声がかかって、私も3年間、行政マンとして許可する側の経験も積みました。行政側から変えられることもあるのではないかと色々試してみたんですけど、まあ、何がどうなって動いていないかっていうことがよく分かりました。【一同】笑。

【杉本】それと「やっぱり水辺が好き」というテーマで言うと、好きが高じて自宅兼事務所を川沿いに建てたってことですね。絶対水辺に住んでやろうと思って物件を探し歩いて、全部の川沿いの敷地を歩いてみた結果、一番いいなと思ったのが川口という旧居留地の元工場兼倉庫のような場所です。そこを手に入れてリノベーションして、365日24時間川を見ながら暮らしています。それがあから、水辺の調整で疲れることがあっても元気になることができます。気が付けば、川を見ながらビールを飲んで、また頑張るという繰り返しを20年ぐらいやっています。よろしくをお願いします。

【山口】ありがとうございます。恐らく後半の議論にもつながると思うんですけど、水辺の調整で何がどう難しかったかを教えてもらえますか。

【杉本】いろいろあり過ぎてどこからお話すればよいか迷うんですけど、2009年からちょうど河川のオープン化も議論されて、大阪の取組みがモデル的に見られていました。大阪府に出向した当初は、出来ないことが多いのは法制度に問題があるからだと思っていたんですよ。だから、規制緩和すれば出来ると思ってたんです。そしたら、規制があって出来ないんじゃなくて、運用で出来ないということが分かってきました。極端に言うと、それは今もあまり変わっていないです。後ほどむちゃくちゃなことを提案しますけど。

【山口】分かりました。楽しみにしています。続いては落語家の林家あんこさんをお願いします。

■落語に描かれる川や船宿、ドラマは川沿いで生まれる

【林家】林家あんこです。よろしくお願いします。私自身、墨田区出身で在住なので川がある中で育っています。父親が落語家ですが、父親の元ではなく初代三平一門に弟子入りしました。浅草、新宿、池袋、上野などで寄席に出ているんですけど、呼ばれれば全国どこの高座にも上がります。今3年ぐらい「笑

点」のアシスタントもやっています。墨田区が北斎誕生の地であることにちなんで、北斎の娘を題材に創作落語をつくり、落語会も開くこともライフワークの一つです。

今日は何をお話すればよいかと思ったんですけども、事前にこんなお話をいただいていた。落語で川や船宿など水辺が登場する噺にはどんなものがあるか、その中で水辺がどんな場所として描かれているか、描かれ方に地域性の違いはあるか、現代と比べるとどうか、などです。それに沿ってお話したいと思います。



林家あんこ（はやしや・あんこ）氏

一般社団法人落語協会所属 ニツ目。師匠は林家しん平、父は二代 林家時蔵。地元・墨田区の『第21代すみだ親善大使』への着任をきっかけに同区の魅力を発信する傍ら、墨田区と縁の深い葛飾北斎の娘・応為を主人公にした自作落語「北斎の娘」を全国の落語会や寄席で口演中。全国のイベント、演芸会はもちろん都内の各寄席で活動。日本テレビ「笑点」のアシスタントとしても活躍中。令和9年3月21日より真打へ昇進する。

落語に登場する川と船宿、そして川岸にまつわるお噺ってどういうものがあるかっていうと、恐らく皆さんぱっと思い浮かぶのが「芝浜」という噺かだと思います。「芝浜」は、魚屋の主人が50両を拾ったところから始まります。当時の1両は10万ぐらいの価値ですから、50両と言えばそれはもう大金です。おかみさんは慌てながらも、拾ったことは夢だったと通し、最後の最後にその50両の入った財布を出して実は夢ではなかったと告白するんです。夢だと通したことで、酒好きで失敗続きだった魚屋の主人が大変に仕事熱心に働いたがゆえに、この50両に頼らずに店を大きくしたという噺なんですね。歌舞伎座なんかでも結構上演されてるんです。これが一番有名になります。

あと、「船徳（ふなとく）」という噺もあります。特にこの「船徳」は柳橋と隅田川が出てくる噺で柳橋

から男性2人が吉原に遊びに行くってところを描いています。ある商家の若旦那、遊び過ぎて父親に勘当されて出入りの船宿に居候したんですが、船頭姿に憧れて自分も船を漕いでみたいと、客を乗せて見よう見まねで船を漕ぐんです。けれども、もう最後に本当に大変なことになって、辿り着けずに船頭を1人雇ってくださいってところで終わる噺です。私も大好きでよくやるんですけども。噺の舞台が私の住んでるところと近いので、とても馴染みがあるんですね。やっぱり川があると、今でいうところのバス通りのようなかたちで船も人も行き交っている。人の交流があって、ドラマが生まれるってところがほとんどなんですけども、大体事件が起きるっていうのがありますね。川岸の連中ってのが、大体皆さん血の気の多い人たちなんで、喧嘩が起きたり事件が起きたりという。「巖流島」という噺もそれに当たります。あとは先ほどの「芝浜」も人情噺ですし、「文七元結(ぶんしちもっとい)」、「身投げ屋」って噺は大川、つまり隅田川に飛び込もうとする人が出てくるという。「文七元結」は、主人のお金を無くしてしまった奉公人が、返せないんでもう自分が命を絶つしかないというところに、通りかかった男が助けるって噺なんです。「身投げ屋」は明治期につくられた創作落語で、身投げをしようとする人に、あ、待って、待ってと。お金に困ってるならあげるよってんでそれを商売にしようという。結局、最後は自分がミイラ取りになってしまいう。自分が身投げ屋をやろうとしたら身投げ屋の人がいて、かわいそうに思ってお金をあげちゃったところで噺が終わるんです。

大体、川が出てくると、上方のほうが多いと思うんですけど身投げとか心中とかも出てきたりしますね。

あと、「辰巳の辻占(たつみのつじうら)」と「しじみ売り」って噺があるんですけど、これ、もともと落語は大阪から始まっていますので、大阪の舞台を江戸に置き換えているんです。川が共通してるんで、こちらの場所に変えてもまあまあ成り立つってことなんですよね。私たちも口伝といって口で伝え、師匠から教わったとおりに後世に残してきました。

季節との関係でいうと、先ほどお話しした「芝浜」や「文七元結」は冬で、年の暮れのお金がない時期に起きる噺です。「船徳」は夏の噺ですね。浅草観音様の縁日に行くために船を出すことが背景にあったりします。昔は今のようクーラーもありませんし、暑い夏に涼しい川辺の噺をすることによって、

涼を求めてもらおうという考えがあったのだと思います。そういうところはやっぱり情緒があると思いますね。こんな感じで私の話は締めさせていただきますね。

【山口】ありがとうございます。1つ伺いしてもよろしいですか。いろんな演目を頭の中に入れておられると思うんですけども、その中で、昔の人が見たであろう風景や水辺に対する感覚と、今の人のそれとの違いについて何かお感じになられることはありますか。

【林家】やっぱり川があることによって人の行き来があって、その往来の中に昔は芸者遊びがあったんですよね。それが大きな違いかなと思います。



▲船宿や料亭が立ち並ぶ「柳橋」

(歌川広重『戸高名会亭尽 柳ばし夜景 万八』/天保6年頃、
出典：国立国会デジタルコレクション

URL:<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1308405/1>)

「遊び場」が今と昔で違うので、今の人には想像しづらいのかなと思います。今だとちょっとコンプライアンスもあるんで、そういう噺をしにくくなってる時代ではあるかと思っています。柳橋も今は置屋さんも芸者さんもないので、そういったところで少しつまづくというか。お客さんの中でもイメージしづらいところがあるかと思っていますね。

【山口】なるほど。「色気(色香)」の部分が大きく違うということですね。

【林家】そうですね。やっぱり「遊び場」が今とは全然違うと思いますね。

3. これまでの気づき、そしてこれから

【山口】ここまで水辺とのかかわりについてお話いただいたことを踏まえて、ここからは水辺活用を進める上で、皆さんが普段課題に感じておられること、お困り事でもいいですし、こうあったらいいのにといった思いを伺いたいです。木村さんから願います。

■船着場を内包するまちが楽しい場所になってこそ
【木村】僕はどうしても水の上からものを見てしまう、その部分は御容赦いただきたいんですが、まず、課題として感じているのは、水域の利用の仕方かなり制約が多いということです。やはりこういう商売をしていますと、例えば水辺、水際に土地を持ってる方や開発しようと思っているディベロッパーさんから、ウォータータクシーさん、うちで棧橋を造ったら来てくれるかな、とお声がけいただくことも多いんです。恐らく20件以上お話があったと思います。ただ、東京都内で私が知る限り、それが実現出来ているのは3、4件です。それも皆さん、大手のディベロッパーさん方です。ウォータータクシーは棧橋をつくることを経験したことはないの、真相まで掘み切れてはいませんが、棧橋をつくることはなかなか難しいようです。

それともう一つは、船の係留場所があまりにも少ないことです。国も東京都も舟運の活性化をうたっており、船の事業を始めたい方は少なくないと思います。私どもは芝浦に昔ながらの水域を確保していたので、幸いなことに水上タクシーを泊めることが出来ました。ただ、そうではない方々は、船を持つように泊める場所がないという問題があります。東京にはマリナが2つありますが、そこもいっぱいなので。

それと、船に乗られる方も、必ずどこかで乗って、どこかで降りる。つまり、船に乗る手前でも何かしら行動してるわけですし、降りた後も何かしか行動をしている。そうすると、結局、船着場を内包するまちが楽しい場所でない、船も必然的に活性化しないんですよ。つまり、船も街を形成するひとつのパーツであるということ。これが、この11年間この事業に携わってきた私の実感です。だからこそ、いかに船着場近くの、広い意味でのコミュニティとどれだけ手をつなげるのか。船の商売はそれに尽きるんじゃないでしょうか。

【山口】なるほど。

【木村】余談になりますが、うちの船ではオプションでマグロ井のドライブスルー体験が出来ます。水上タクシーに乗ったまま、マグロ井を受け取って船上で食事が出来るサービスなんです。かつて晴海の近くの冷凍倉庫会社がマグロ井のお店を直営していて、超人気店でした。水産ふ頭で岸壁がすごく高いのですが、タモを使ってのキャッシュオンデリバリーがまた好評でした。他にも立ち寄り先は複数ありますが、何れも制度の枠から半歩踏み込んでらっ

しゃる肝の座った方々です。杉本さんのゲリラ的活動と共通するかもしれませんが、出来る範囲でどれだけレギュレーションを柔らかくしていけるか、これからも体现していこうと思っています。

■立場が違えば言語が違う、求められるのは翻訳

【杉本】いや〜、本当に大阪でもウォータータクシーをやっていたきたいぐらいです。恐らく日頃からのコミュニケーションや信頼関係があるからこそ、マグロ井のやり取りが出来ると思うんですよね。船とまちの関係と同じように、まちとまちの中でも日頃からの見えない関係性が、水辺のまちづくりの時にすごく大事なんです。

【山口】そうかもしれませんね。

【杉本】でも、そこを担う人がなかなかなくて。私たちが運営しているβ本町橋という拠点施設では、コミュニケーションマネージャーを常駐させているんです。そういうつなぎ役を担うために、私はこの事業をやっているといってもいいくらいです。一番経費をかけている部分が、彼女たちの人件費なんです。表向きは館の運営をしてるんですけど、裏ではもう地域とか船会社とかとつながって、あと行政もですね。こういうふうに使いたいとか、こうしたいという思いは、各地域語、行政語、船会社語、全部に翻訳して話すとうまくいくんですけど、それがないと言語が違うので話が通じなくて、ぱさっと関係性が切れちゃうんです。つなぎ役になる人が絶対必要だと思って、今まさに小さい拠点からチャレンジしています。

【木村】仰るとおりですね。文意を変えずに翻訳が出来ることが非常に大事だというのは、ものすごく実感します。



■水辺のもつ「正」と「負」、それぞれの担い手が接点をつくり一緒に乗り越えていく

【山口】ありがとうございます。続いて佐藤さん、これまでの30年、どう変わってきたのか、そしてこれから30年、どのような水辺や水辺の文化、ライフスタイルが生まれることを期待されていますか。お伺い出来ればと思います。

【佐藤】正直、役所は頭が固いという説が一般に言われてますけど、僕は過去の30年においても、大きな改革をされて来られたなと実は思ってるんです。京都の川床なんか特別じゃないですか。あれもぎりの話でやってきてますよね。

【山口】そうですね。

【佐藤】その中で、こんながあったらいいのになと子供の頃に思ったようなことが、少しずつ実現していってると感じています。レギュレーションの変化なり、それこそ杉本さんが仰っているように、翻訳してくれる人が現れて、立場は違えど共通の認識をもって進めることが出来るようになってきたのだらうと思います。

恐らく水辺というのは、今まで民間はほとんど出店出来ないという諦めがあった中で、今ではすごくいい活用の仕方がなされてるんですね。僕にとって憧れというか、やられた感があるのは富山の富岩運河（ふがんうんが）環水公園のレストラン・シャトーや福岡の大濠公園の池沿いのRoyal Garden Caféです。仲よしの人が携わっていますけど、なんかずるいわ、よくやってるなど。それは、うちの大阪中之島のガーブもそうなんですけど、民間が出店出来るようになったということは、裏を返せば役所も色々なことを手掛けて来られたんだらうな、大変だらうけれどもよくやって来られたんじゃないかと思っています。それがこれまでの30年ですね。



▲中之島公園内の GARB weeks

出典：公式ウェブサイト

<https://garbweeks.com/atmosphere/?id=0>

未来の30年ということでは、それをもう一步頑張ろうぜということと、やっぱり日本の持っている津波、豪雨などの天災リスクを乗り越えて、新しいものを生み出すということですね。

豪雨ということでは、僕は大学が神戸だったんで、神戸の都賀川（とががわ）が浮かびます。普段は子どもたちが河原で遊べるような優しい川が、豪雨の時はとんでもない水量で凶器に変わる。僕は成す術もないこの矛盾の部分、恐らく役所の方は考えていらっしゃるんだろうな、と。つまり水辺の利用に「正」と「負」があるとすれば、我々のような、正の方に着目してやる人間と、負を背負い込まないといけない人間がいるんじゃないかと。その両者が何か接点を作って一緒に乗り越えていくことが大事だと思うんです。こういう座談会の機会もそうなんですけど、こういう形で触れ合い、意見交換する場を持っていただけらな、という思いがあります。全国飛び回ってはいますが、そういう機会であれば、僕も時間を割いてでも参加させていただこうと思いました。

【山口】ありがとうございます。

■オープン化NEXT

【山口】じゃあ、杉本さんからぜひ。

【杉本】これからの30年という話で、私、たまたまこの『水都大阪の教科書』を書く仕事をやらせていただいたことがあって、整理しながら思ったんですけど、30年前って、今日の皆さんのお話にあったように、とにかく水質が汚くてそれをきれいにするのを一生懸命やることから始まりました。20年ぐらい前になると、ブルーシートだらけの中之島公園を含めて河川を整備することが起こって。そして、今度はそこに来てもらうためにオープン化して、民間に出店してもらい、魅力を作ってもらい、人に来てもらってということが始まるのが約10年前。

そうやって時系列で捉えた時に、今はオープン化が進んできて、「オープン化NEXT（ネクスト）」というか、次に何をするのかを考える局面に来ていると考えています。

大阪で水都の政策に関わっていても感じるのは、水辺がそこそこきれいになったし、いいお店も出来てきたし、何が問題なのかみたいな市民の空気感ですね。20代の若い人に聞いても、「もう今のままでいいんじゃない」って言われるんですよ。

【山口】えー、そうなんですね。

【杉本】そうなんです、これ以上望まなくてもいい

と。私がまだまだって思うのは世代の違いなのかもしれないですけど、例えばもっと社会包摂の場であるとか、環境について考える場であるとか、水辺はもっといろんな機能を果たしていけると思っているんです。



▲『水都大阪の教科書』

提供：一般社団法人水辺ラボ

活動の幅を広げる方法の一つとして考えているのが、河川占用料の柔軟な算定についてなんです。河川占用料って、条例で全部値段が年平米で決められていて、それってランクがあるじゃないですか。集客施設を有するかと集客施設を有しないかで、同じ面積でも5倍の値段の差があるんですね。これは大阪の水面占用条例の場合ですけど。例えば、500平米で考えた時に、集客施設と見られるか否かで年間で300～400万円変わってくるんです。占用料はもちろん支払うべきなんですけど、一番高い商業的集客施設と見られるのか、お金が色々動いているだけでこれは公的な役割を果たす施設ですねと見られるかで、年間1人を雇えるかが変わってくるといことです。1人に専従してもらえれば、色々なことが出来るじゃないですか。でも結局、河川占用料は河川管理者が決めて、一方的に出されるものなので、河川占用料の協議が出来ないんです。だから公的な民間活動を認められるような河川占用料の算定法があれば、活動の多様性や主体の多様性が劇的に広がると思っています。それが、オープン化の次(NEXT)ですね。オープン化後に多様な機能を生み出す、そのために民の主体をいかに多様化していくかがすごく大事だと思っています。

■目指すは水辺利用計画、そして水辺法

【杉本】他にも、水面利用について最近考えているのが、都市計画で土地利用計画が決まっているように、水辺でも同様の計画があっても良いのに、ということです。例えば、このエリアは大きい船が頻繁に使う場所、ここは小規模な船の利用が多いからルールを軽くする、ここは特に誰も使っていないから係留してもいい、ここは隣接する陸の土地利用に

合わせよう、そういう河川の「水面利用計画」なるものがあるとよいのではないかと考えているんです。今はその基本的な考え方がないために、全て駄目と言われてしまう。そして将来的には、水辺利用計画を発展させて川とまちを一体的に活用する「水辺法」を作ったらどうやという野望を持っています。

行政は法の執行機関なので、法にあることしか出来ないのが原則の中で、思えば、水辺の活用をまちと一体的に考える法律ってないんですよ。河川法は河川を考えているし、公園法は公園を考えている。まちと川をつなぐ「かわまちづくり」という国土交通省の制度が出来たのは素晴らしいんですけど、もう少し広いスケールで、法制度を全部つなぐものがないと、なかなか進まないことも多い。「水辺戦略特区」とかも一案として持っています。そういう拠り所があると、公的なセクターは動きやすいかもしれないな、と常日頃から思っています。

【山口】なるほど。1997(平成9)年の河川法改正で、河川環境の整備・保全が法制上の目的に明記されて30年の節目を迎えるわけですけど、それじゃ足りんと。

【杉本】足りません。

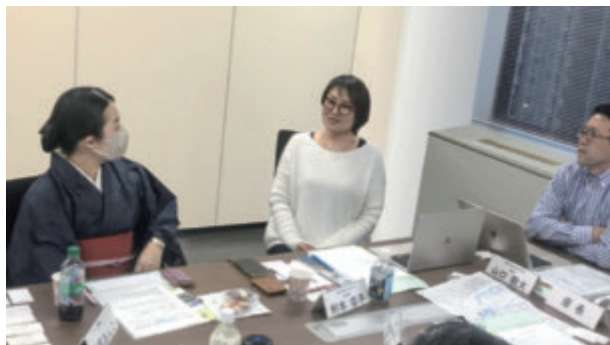
【山口】河川だけではなくて、やっぱりまちと一体的に進めることが大事だということですね。かわまちづくりもその一つだと思いますが、その強化も含まれるということですね。

【杉本】はい、そのとおりです。

【山口】先ほど運用の壁についてのお話がありましたが、恐らく管理者側と事業者側の目指すゴールが違うことが、関係していると思うんです。

【杉本】そうですね。

【山口】だから、同じテーマで話していても、見えているゴールのイメージが違っていると全然違う解釈になってすれ違いますから。今日の座談会でも、今ない状態で未来を想像出来るかが大事だという話がありました。実際には、想像出来ない人も多いでしょう。目の前に実際になれば、ゴールや作ろうとするものの必要性がイメージ出来ない。それでも、両者が一緒にやっていかないといけない場合が多いわけです。こんな時は将来の姿をイメージ出来るように、想像出来る側が絵や実証実験や言葉など、いろんな形で表現して、働きかけることが大事ですね。水辺に関わるステークホルダーは多いですから、みんなで様々な対話や協働を通じて、計画づくり、実施、検証というサイクルを段階的に何度も進めていくしかないのかな、と思います。



■落語の力を借りて、見えないものを見せる

【杉本】それに関連して、伺ってみたいことがあるんです、あんこさんに。

【林家】突然ですね、何でしょう。

【杉本】いい状態の水辺がまだ目の前にない段階で、見えてないもの（ゴール）を見せる（想像させる、眼前化する）にはどうしたらいいのでしょうか。何かうまく伝え方とかあれば、落語家さんの視点から伺ってみたいです。

【林家】そうですね。具体的なことが言えなくて申し訳ないんですけど。こうすれば良かったなと思うことをひとつ。7年ほど前に、隅田川沿いのカフェで落語会を開いたことがありましたので、そういう場で今日の皆さんのようなスペシャルゲストを呼んで、トークあり、最後に川や海辺に関する落語を聞いてもらうイベントが出来てもよかったのかなって思いました。実際に水辺がある現場で噺をすることで、いろんな年齢層の人たちも水辺に引っ張って来れたかもしれないな、と。墨田区ではミズマチという水辺の拠点施設を活用しようという話もあって、そこなら若い世代もたくさん訪れますし。

■水辺の利用、水辺の文化が広がっていくために

【木村】ちょっと話がずれるかもしれませんが、芝浦辺りの狭い運河を通っていると、運河が狭くて橋も低い。一步路地裏に入り込んだような風景の中で道行く人とのコミュニケーションが生まれ、国内外を問わずお客さんが結構喜ばれるんですよ。一方で、我々は御用命があれば両国や浅草、スカイツリー方面にも船を出すんですが、隅田川は川幅が広くて橋も高いので、道行く人との距離があるのは致し方ないとして、その数が圧倒的に少ないんです。そうすると、まちの体温を感じない単調な景色が続くからなんではなかね、急にお客さんがスマートフォンを眺め出す。この時間がつらいんです。私が以前、水辺の利活用に関するあるイベントに出た時に、主催者が川沿いの遊歩道のイメージをコミカ

ルに表現していて、、、それは「暇そうなサラリーマンがたばこを吸ってる場所」という。確かにそうなんです。遊歩道もかなり整備されたことは見てきましたが、人通りが圧倒的に増えたのかと言われるとそうでもない。地元の方を中心に少しずつマルシェが開催されたり、運動体が盛り上がっていることももちろん存じ上げています。ですのでセーヌ川のほとりのように、地元の人も観光客もそぞろ歩いているようなまちにならないものかなって、いつも船から見ながら思いますね。

【山口】確かに先ほど話に出た「水辺は日常であり生活の延長であることが大事」に通じるかもしれないですね。落語も、日常の生活の場だから噺の舞台になるわけですし、水辺が噺の彩りにもなっている。恐らく水辺の日常のアクティビティをどうやってつくっていくのかということが、遠回りかもしれないけれども、水辺のカルチャーをつくっていく意味で本当に大事だなと思って皆さんのお話を伺っておりました。堤防のありかた、河川の整備や管理のありかたの一つ一つが、生活の舞台としてつくられていくようなことがさらに促進されると、日常の中での水辺の利用、さらに水辺の文化が広がっていくのかもしれないですね。

飲食も生活の一つですし、スポーツも、芸能も。いろんな人たちが、ビジョンをうまくことづくりながら、さらにそれをうまく取り込みながら議論する場があちこちで生まれたら、ちょっとでもよくなるかなと感じた次第です。

皆さん、今日は、非常に内容の濃いお話をありがとうございました。



▲「すべては、ここでのワンシーンです」

《写真提供》東京都港湾局

参考：東京ウォータータクシー株式会社

- 1) ライブハウス「インクスティック芝浦ファクトリー」のこと。通称「インク」とも呼ばれていた。